

第八節 工・鉱業

一 工業

沖永良部島における工業で特筆するようなものはほとんどないが、古老の言によれば部落に神高い屋敷があるがそれは昔かじ屋があつた所であると言われ、古くからあつたようである。

和泊のかじ屋は鹿児島から渡来してきた人々によって経営されていた。すなわち、ジンシキ屋（前田甚助）、カミシキ屋（吉崎万次郎、日置出身）、カキチ屋（児玉嘉吉、加治木出身）の順である。

西原字の西に俗称「テーガナシ」という泉があるが、その近くにアダンがうっそうと茂った丘があり、土地の人々は「ハニヤマ」といって、そこに入るのを避けていた。鹿児島から来た人で、和泊のジンシキ屋という、か



石でせぎったあと追い込む



シマ舟



ナガリ（夜流れ）



ジンシキジャージャ(前田甚助)の墓

じ屋が一年のうち何か月かここに住み、鉄くずをこの地に捨てたと言われている。

なお、西原に「前田家之墓」と記された無縁墓があるが、土地の人達は「ジンシキジャージャの墓」と呼んでいる。前田甚助氏はジンシキ屋（現徳田酒造所の倉庫）で開業していた。

吉崎氏は最初、現登記所西側で伊名隆屋南側のヤシ

ニヤ屋で開業し、後カミシキ屋（現碓山久亮氏宅地）に移り、空襲中は上平川で開業していた。そのときの弟子が山田鉄工所主（山田島利氏）である。
カキチ屋（児玉嘉古氏）は、現豊山興三氏宅地で開業していた。

これらの人たちが本土の新しいすぐれた農具を普及させたことにより、永良部農業は大きく発展したのである。

二 鉱業

沖永良部における鉱業は、明治の中期から大正にかけて、和字の大野勉正氏（勉充氏祖父）が和字のヒージョ、上手々知名のナーゴ山、瀬名等でマンガンを探掘したのがその始まりである。勉正氏は全財産をマンガン採掘に投入したとのことである。またミシシヤ（ガラソウの上）のアンチモニーを発見したのも勉正氏であると言われている。